

# タイ語母語話者による条件表現の縦断研究 —全体的な分析—

スニーラット・ニャンジャロンスック

## 要 旨

本研究は、タイ語母語話者日本語学習者を対象として、日本語の条件表現「と・ば・たら・なら」の習得を縦断的に観察したものである。調査は文法性判断で、6ヵ月ごとに1回行った。調査した条件表現は7つの意味用法に分類した。それはA: 仮説「なら」、B: 反復・習慣、C: 仮説「モダリティ状態性」、D: 仮説「モダリティ動作性」、E: 確定、F: 一般、G: 反事実である。その結果、4回の調査を通し変化した使用率によって、日本語の条件表現は困難な項目であることが確認できた。学習者は様々な方法で日本語の条件表現を習得していくと考えられる。例えば、A(仮説「なら」という意味用法は「なら」の使用と共に「ば・たら」も使用される現象が見られた。これは中国語、韓国語母語話者日本語学習者の場合にも見られ、過剰般化が原因と考えられる。用法G(反事実)については先行研究の結果と異なり、学習者にとって習得が困難ではないことがわかった。

【キーワード】 縦断研究、文法性判断、「なら」、過剰般化、反事実

## 1. はじめに

日本語の条件表現は初・中級学習者ばかりでなく、上級学習者にとっても難しいという声が多い。そのうえ、習得過程の具体的な内容は明らかにされていない。第二言語としての日本語の習得研究として条件表現を扱ったものは、管見の限りでは稲葉(1991)、ニャンジャロンスック(1999、2001)である。稲葉(1991)は条件表現の後件制約によって、習得が難しくなると結論づけている。ニャンジャロンスック(1999)は「と・ば・たら・なら」それぞれの形式によって習得上何が困難であるかが異なると述べている。また、ニャンジャロンスック(2001)は OPI<sup>(1)</sup>による中国語母語話者、韓国語母語話者、英語母語話者の発話データにおける条件表現の習得を調べた結果、習得階層モデルを第一階層と第二階層に分類することを試みた。第一階層では、「仮説」などの用法が入っており、習得は容易であるが、第二階層では、「反

事実」などの用法が入っており習得が困難である。しかし、これらの研究はいずれも横断的に行われたため、条件表現の習得過程を知ることができない。習得の困難がどの段階で生じてくるのか、どの段階で消えていくのかを推測することは、長期に渡り習得過程の発達段階を見ることによって明らかになる（迫田 1996）。したがって、縦断研究が必要になると考えられる。

以上のような理由で、学習者の習得過程を縦断的に観察し、条件表現の習得の傾向と困難の要因を明らかにすることを試みた。

## 2. 調査の概要

### 2.1 対象者

調査の対象とした日本語学習者は20名であり、全員が1998年度にタイの4大学(a、b、c、dとする)に入学した学生である。調査は1999年に開始したため、全員は2学年に在籍中であった。1学年の時、全員が日本語の授業を週約6時間受けていた。調査対象となった4大学はバンコク市内及びバンコク郊外の日本語学科のある4年制大学である。cとd大学は1学年入学時に専攻学科が決定し、b大学は2学年進級時に、a大学は3学年進級時に専攻学科が決定する。したがって、初回の調査実施時、対象者のうち、a大学の学生は学部生としてまだ専攻が決定していない状態であるが、b、c、d大学の場合は、日本語学科に所属している学生であった。対象者は、4年生になるまで、つまり3年間、この調査に参加することを承諾している。対象者の母語はいずれもタイ語である。

### 2.2 調査時期

調査は前期と後期<sup>(2)</sup>、表1のように約6ヵ月ごとに5回の文法性判断テストを行った。ここでは、5回目を除いて、4回の調査結果について報告することとした。

表1 調査時期

調査時期	学年
① 1999年9月	2学年前期
② 2000年3月	2学年後期
③ 2000年9月	3学年前期
④ 2001年3月	3学年後期
⑤ 2001年8月	4学年前期

### 2.3 調査方法

調査は表2のように文法性判断の形式で行われた。テストは与えられた調査文が文法的に正文であるか、非文であるかの判定を○×式で求めた。また、母語の影響を見るために、正文と判断した文をタイ語で考えた場合、どのような意味であるかという解釈を記述してもらった。調査結果の分析にあたっては、正答の基準を決定するため、日本語母語話者30名にも回答を依頼した。

表2 調査文の例

場面：大学で、先輩と後輩との会話
後輩：きのう寮に（ ） a. 帰ると、木村さんから手紙が来ていました。 (タイ語) _____
( ) b. 帰れば、木村さんから手紙が来ていました。 (タイ語) _____
( ) c. 帰ったら、木村さんから手紙が来ていました。 (タイ語) _____
( ) d. 帰るなら、木村さんから手紙が来ていました。 (タイ語) _____
先輩：木村さんは元気？
後輩：ええ、元気ですよ。来年またタイに来るらしいです。
先輩：そう。たのしみだね。 (振り仮名及びタイ語訳略)

### 2.4 調査文の意味分類

条件表現の意味分類はニャンジャロンスック (2001) が設定したものを参考し、以下の表3のようになる。

今回考察から除外した用法は反事実 (一過去)、予定、反復・習慣 (一過去)<sup>(3)</sup>である。さらに、「仮説」の中では、モダリティ制約がある文 (状態性述語と動作性述語) と「なら」しか使えない文 (例：インターネットを使うなら、あちらのパソコンのほうがいいですよ) に分けた<sup>(4)</sup>。本調査で分析対象となる用法は次のようにまとめられる。それは A: 仮説「なら」、B: 反復・習慣 (+過去) (以下「反復・習慣」と呼ぶ)、C: 仮説「モダリティ状態性」、D: 仮説「モダリティ動作性」、E: 確定、F: 一般、G: 反事実 (+過去) (以下「反事実」と呼ぶ) である。

表3 条件表現の意味分類

用法	意味と例文
反事実（+過去）	すでに起こった出来事に反する事柄を想定して仮定する 例：あの時彼と結婚していたら、私の人生はもっと幸せだったはずだ
反事実（-過去）	事実に反する事柄が実現した場合を想定して仮定する 例：宿題がなければ、夏休みはもっと楽しいのに
仮説	実際に未来に実現するかどうか分からないが、それが実現した場合を想定して仮定する 例：あした雨が降れば、試合は中止になるかもしれない
予定	未来の個別的な条件の中で、ある程度予定されている事柄 例：向こうに着いたら、電話してください
一般	前件の条件を満たせば、自動的に後件の事柄が成立する 例：春になると、桜が咲く
反復・習慣 （+過去）	もう実現しない過去の習慣や動作の反復を表す 例：学生のころは、試験が始まると胃が痛くなったものだ
反復・習慣 （-過去）	特定の人やものの習慣や動作の反復を表す 例：兄は冬になると、毎年スキーに行く
確定	前件後件ともにすでに実現している特定の事柄を表す 例：駅に着くと、友達が迎えに来ていた

## 2.5 調査の目的

学習期間が長くなるにつれて、日本語学習者の条件表現の習得状況がどのように変化していくのかを以下の2点を目的として調査し、その結果について分析した。

- 1) 調査4回を通して、条件表現のうち、どの用法の習得が進むか、どの用法の習得が進まないかを調べる。
- 2) 習得が進む要因と進まない要因について考察する。

## 3. 分析結果

### 3.1 高校時代の日本語学習経験と条件表現習得との相関関係

本調査の対象者には、高校時代に日本語を学習した経験がある者となない者が混在している。したがって、これからのデータ集計に高校時代の学習経験を考慮するべきかどうかについて調べる必要がある。もし、この二つのグループに差がない場合はデータ集計を分ける必要がないと考えられる。表4は高校時代の日本語学習経験と4回のテストの合計を点数で示したものである。高校時代の日本語学習経験の有無と条件表現の習得との相関関係を調べるため、ここではt検定を使用した。検定の結果、有意

な相関が認められなかった ( $t=1.97, t<.05, t.05=2.09$ )。したがって、以下データ集計はまとめて行うことにした。

表4 高校時代の日本語学習経験と点数

学習者番号	日本語学習経験	点数	学習者番号	日本語学習経験	点数
A1	なし	160	C3	なし	157
A2	なし	177	C4	なし	152
A3	ある	145	C5	ある	152
A4	なし	187	C6	ある	146
B1	なし	166	C7	なし	141
B2	ある	155	C8	なし	141
B3	なし	162	D1	なし	163
B4	なし	155	D2	なし	178
C1	なし	147	D3	ある	123
C2	なし	122	D4	なし	164

### 3.2 全体の傾向

#### 3.2.1 各形式の正答率

「と・ば・たら・なら」形式別の正答率は図1、2、3、4で示している。ここでいう正答率はそれぞれの形式を使えるところに正しいと判断し、使えないところに正しくないと判断した率である。グラフで表示されたものがそれぞれの形式が使える用法である。

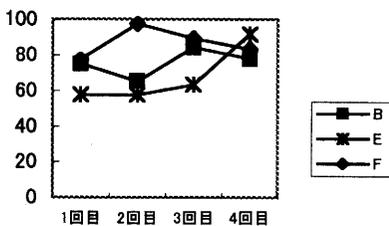


図1 「と」の正答率

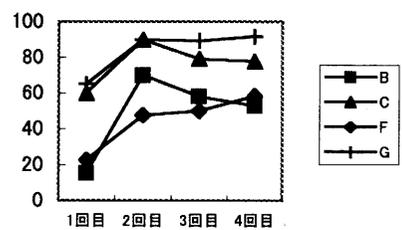


図2 「ば」の正答率

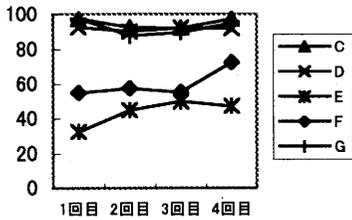


図3「たら」の正答率

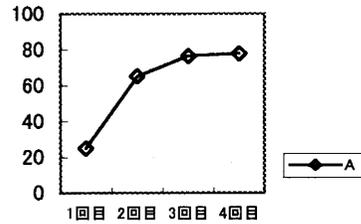


図4「なら」の正答率

「と」は用法 B、E、F で使うことができる。「と」の正答率（図 1）を見ると、まず、B（反復・習慣）という用法に対して、学習者は「と」が使用できることがわかっていると見えるが、正答率は上がったたり、下がったりしている。E（確定）という用法は調査 4 回を通して、正答率が上がっている。F（一般）については、2 回目に 100% に近い正答率となったが、3 回目と 4 回目は下降している。

「ば」は用法 B、C、F、G で使用できる。図 2 を見ると、B（反復・習慣）では、1 回目の正答率は非常に低かったが、2、3、4 回目では、正答率は急上昇している。C（仮説「モダリティ状態性」）は B と同じような変化が見られたが、1 回目の正答率は約 60% であった。F（一般）と G（反事実）という用法で正答率が上がる傾向がある。

「たら」は C、D、E、F、G の用法で使える。図 3 を見ると、B（反復・習慣）の用法については、母語話者の回答にゆれがあるため、分析対象外とした。C（仮説「モダリティ状態性」）、D（仮説「モダリティ動作性」）、G（反事実）という三つの用法の正答率は同じ方向に変化していくといえる。特に 1 回目の正答率は他の形式と比べて非常に高かった。E（確定）の正答率は 3 回目まで上がる一方だったが、4 回目になるとやや下がった。F（一般）では、4 回を通して、正答率が上がったたり下がったりしている現象が見られた。

「なら」については、A という用法のみに使える。図 4 に示されているように、正答率は順調に上昇している。次に各用法について述べていく。

### 3.2.2 各用法の使用状況

意味用法の A（仮説「なら」）には、「なら」しか使えないが、「と・ば・たら・なら」の使用率（図 5、6、7、8）を見ると、1 回目の調査を実施した時、「なら」は未習項目であったため、使用率が非常に低く（25%）、代用として「ば」「たら」が使用されていた。「なら」を学習した後は、「なら」の使用率が増えたことが観察された（25%→65%→76.3%→77.8%）。しかし、最初の段階に代用した「ば」「たら」の使用率を見る

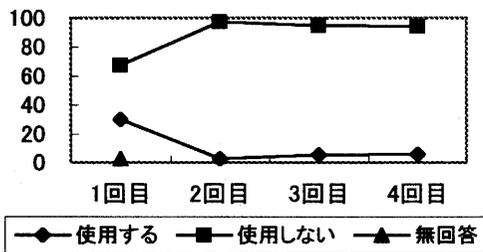


図5「と」の使用状況(単位:%)

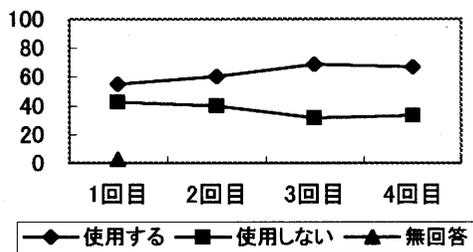


図6「ば」の使用状況(単位:%)

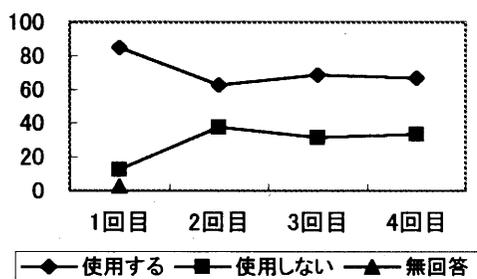


図7「たら」の使用状況(単位:%)

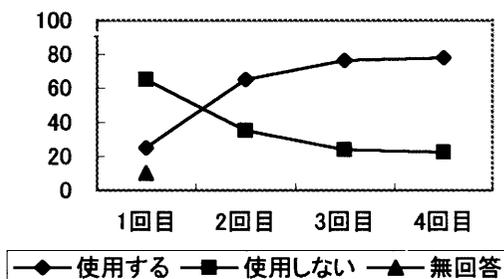


図8「なら」の使用状況(単位:%)

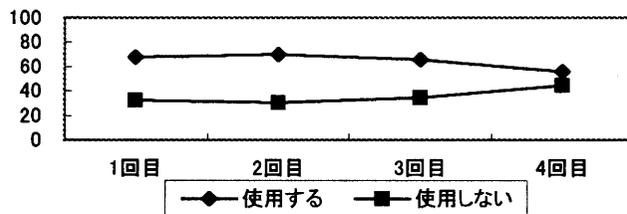


図9 仮説「モダリティ動作性」:「ば」の使用状況(単位:%)

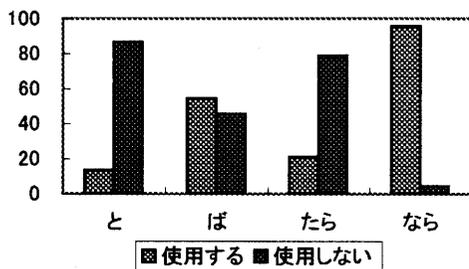


図10 仮説「なら」:中国語話者の使用状況(単位:%)

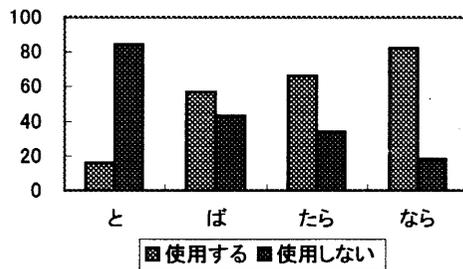


図11 仮説「なら」:韓国語話者の使用状況(単位:%)

と、減少は見られない。さらに、学習者が記入したタイ語の解釈を見ると、正しいと判断した「ば」「たら」「なら」文の解釈は全て同じであった。すなわち、この用法には、文脈設定があるにもかかわらず、学習者は「ば」「たら」「なら」文の違いを区別できていないことがわかる。

B (反復・習慣) については、「と」と「ば」が使用できる。調査1回目に「と」が「ば」より圧倒的に多く使用された (図1、2)。2回目よりは「と」も「ば」も使用されている。

C (仮説「モダリティ状態性」) の調査文の述語は、全て状態性である。本調査では、「ば」「たら」がこの用法で使用できる。図2、3を見る限りでは、この用法は定着していると考えられる。

D (仮説「モダリティ動作性」) では、述語は全て動作性であるため、「ば (動作性)」にはモダリティ制約があり、「たら」しか使用できない。しかし、図9を見ると、学習者は「ば」も使用が可能であると判断してしまっている。すなわち、この用法では、「たら」しか使用できないということが学習者に定着していないことがわかる。

E (確定) という用法では「と、たら」が使用できるが、図1を見ると、「と」の使用率が急激に上がっている。タイ語の解釈から見ると、学習者は「と」に対し、条件を表すよりも、時間を表すと認識していると察せられる。

F (一般) という用法では、「と、ば、たら」が使用できる。図1、2、3を見ると、4回の調査を通し、この用法の習得は進展しているといえる。

G (反事実) という用法は学習者にとって困難な用法ではないようである。この結果はニャンジャローンスック (2001) とは異なっている。ニャンジャローンスック (2001) では、中国語、韓国語、英語母語話者の産出した発話を分析した結果、「反事実」の習得が困難となっていると述べられている。

#### 4. 考察

調査4回の正答率と使用率を通して、日本語の条件表現は定着しにくい項目だと考えられる。理由としては、益岡 (1993) が提示したように日本語の条件表現の複雑さを挙げるができる。益岡によると、日本語の条件表現は他の言語にあまり見られない多様な類義表現 (と・ば・たら・なら) を有している。また、その言語形式間には、微妙な使い分けがみられるため、条件表現の習得は日本語学習者にとって困難な項目であると述べている。したがって、学習者が「と・ば・たら・なら」に対して混

乱を起こすことは当然である。そして、学習者は学習者なりのストラテジーを持って習得していくのではないかと考えられる。「と」は時間を表す文に、「ば」「たら」「なら」は条件を表す文に使用が分けられて用いられる傾向が大きいため、「なら」しか使用できない領域に「ば」「たら」も使用してしまう現象が見られた(図5、6、7、8)。この現象がタイ語母語話者に限って現れているかどうかを調べるため、中国語、韓国語母語話者日本語学習者<sup>⑤</sup>を対象とした横断的調査を行ってみた。その結果、タイ語母語話者と同じ現象が生じることがわかった(図10、11)。したがって、原因は母語の転移などではなく過剰般化であると思われる。

また、モダリティ制約については、まず、稲葉(1991)の結果を見てみたい。稲葉は英語母語話者を対象者とした結果、モダリティ制約が英語と異なる領域(「と」「ば(動作性)」)の習得が困難であると述べている。本調査で得られた結果には「と」は問題なく、「ば(動作性)」の習得が困難であるとしている。フォローアップインタビューによると、学習者は「と」にはモダリティ制約があることがクラスでよく強調されていたという言及が見られた。「ば」がつく述語は動作性であるか状態性であるかの判断が学習者にはかなり難しいと考えられ、モダリティ制約がない状態性の習得が容易であるのはうなずける結果である。

本調査から得られた「反事実」の結果は先行研究と異なっている。理解能力を測る法を用いた本調査の結果と産出能力を測る法を使用したニャンジャローンズック(2001)の結果と異なっていることは、産出の面と理解の面とでは習得のプロセスや困難点が異なっていることを示している。Berent(1985)は英語の条件文を三つのタイプ(事実、反事実、過去の反事実)に分け、有標性を見るために、英語第二言語学習者を対象として、産出の面と理解の面を測る二つの調査法を用いた。その結果、産出の面では、過去の「反事実」が有標となり、理解の面では、「事実」が有標となる。これは、統語論や認知学がかかわっており、有標な項目は産出の面であるか理解の面であるかによって無標な項目に変化する場合もあると述べている。本研究の結果によって、Berent(1985)の指摘したことが支持された。

## 5. おわりに

本研究はタイ語母語話者による条件表現の習得について長期に渡って観察を行い、分析と考察を試みた。その結果、次のようなことが明らかになった。

i) 条件表現の全ての用法は習得が促進されるとは言えない。

ii) 習得が促進されない用法は用法 A (仮説「なら」)、D (仮説「モダリティ動作性」) である。

iii) 用法 A では、「なら」しか使用できないにもかかわらず、「ば」と「たら」も使用されていた。これはタイ語母語話者に限らず、中国語、韓国語母語話者にも見られるため、過剰般化が原因と考えられる。

iv) 用法 D では、「ば」がつく述語が動作性である場合、モダリティ制約があるというルールは定着しなかった。学習者には「ば」がつく述語が動作性であるか状態性であるかの判断が困難であると考えられる。

今回の対象者は、4 つの大学に所属している学生である。各大学では、カリキュラム、教材、学習活動などがそれぞれ異なっており、それらが習得にどのような影響を及ぼすかということに関して調べる必要があると思われるが、これについては今後の課題としたい。また、個人差についての詳しい分析もする必要がある。

## 注

- (1) OPI (Oral Proficiency Interview) とは、「最長 30 分という限られた時間内の面接で、できるかぎり信頼性のある自然発話を必要最大限採集し、それを ACTFL (全米外国語教育協会) 外国語能力基準に照らし合わせて被験者の口頭能力を測定する評価法である。」(鎌田 1999)
- (2) タイの大学では、前期は 6 月～10 月中旬であり、後期は 11 月中旬～2 月となっている。
- (3) 反事実(一過去)は「仮説」に近いと思われたため除外した。また、反復・習慣(一過去)は「一般」と特定であるかどうかという区別しかないため除外した。予定の文はモダリティ制約がかかわっており、モダリティ動作性の観点から分析対象とした。
- (4) ニャンジャロンスック(1999)では、タイ語母語話者にとって、「なら」しか使えない領域にも「ば」と「たら」の使用が多く観察されたため、縦断研究によってその要因を明らかにすることができるのではないかと試みた。
- (5) 中国語母語話者は台湾で台湾大学の日本語学科に属している 3 年生 (15 名)、4 年生 (10 名) と東海大学の日本語学科に属している 4 年生 (8 名) である。韓国語母語話者は韓国で世宗大学の日本語学科に属している 3 年生 (16 名)、4 年生 (4 名) である。

## 参考文献

- (1) 稲葉みどり (1991) 「日本語条件文の意味領域と中間言語構造—英語話者の第二言語習得過程を中心に—」『日本語教育』75, 87-99 日本語教育学会
- (2) 鎌田修 (1999) 「KY コーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第二言語としての日本語習得に関する総合研究』科研研究報告書 08308019 代表者 カッケンブッシュ寛子
- (3) 迫田久美子 (1996) 「指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程—対話調査による縦断的研究に基づいて—」『日本語教育』89, 64-75 日本語教育学会
- (4) ニャンジャローンスック・スニーラット (1999) 「タイ語母語話者による条件節「と・ば・たら・なら」の習得」『言語文化と日本語教育』18, 25-35 お茶の水女子大学日本語文化学会
- (5) ニャンジャローンスック・スニーラット (2001) 「OPI データにおける「条件表現」の習得研究—中国語, 韓国語, 英語母語話者の自然発話から—」『日本語教育』111, 26-35 日本語教育学会
- (6) 益岡隆志 (1993) 「日本語の条件表現について」『日本語の条件表現』: 1-20 くろしお出版
- (7) Berent P.Gerald (1985) *Markedness considerations in the acquisition of conditional sentences. Language Learning. Vol.35, No.2 337-72.*

(お茶の水女子大学大学院)

Longitudinal Study of Conditional Sentences Acquired  
by Thai Learners of Japanese  
—General Analysis—

Suneerat NEANCHAROENSUK

This study observed the longitudinal acquisition of conditional sentences using "to", "ba", "tara", "nara" by Thai learners of Japanese. Using the grammatical judgement method, an examination was held once every six months. The definitions of conditional sentences were classified into seven categories. A: hypothesized-*nara*, B: habitual, C: hypothesized -modality, D: *yotei*, E: *kakutei*, F: general, G: counterfactual. As a result, it is confirmed that the acquisition of Japanese conditional sentences is difficult. The learners use many strategies to acquire these Japanese conditional sentences. For example, In the A: hypothesized-*nara*, the learners used "nara" and also used "ba" and "tara" at the same time. And this can also be seen in the acquisition of Chinese and Korean learners of Japanese. This may relate to the overgeneralization. And in the G: counterfactual, the acquisition is not difficult which different from the result of other research.

(Graduate School, Ochanomizu University)